生涯を花畑

郷土アルバム

猫又退治（二）

池田嘉一

吉十郎がねている所へ、数人の村人がかけつけて頼みましたが、「ごらんのとおりの病気で力がありませんから……」と辞退しました。しかし村人たちが「請人のためですから……」と声をそろえて頼みますと、根がりちぎな吉十郎「請人のためとあらば、まいりましょう」と承諾したので、村人たちは大喜びでした。

吉十郎は女房に向かい「屋敷のしたくをしてくれ、猫又と戦えば生きて帰れぬかもしれない、何でもいいから初ものを食わせてほしい」と言ったので、女房はゆうがおの初切りをしるにして出しました。やがて食事を終わった吉十郎は、つゆざのひとえを着、もも引きをはき、はばきをつけ、一幅帯をたすきにかけ、上杉謙信公から同家にたまわった青井下坂と名づける二尺八寸の名剣をこしにさし手やりを持ちました。

まず大神宮に祈り、仏壇に向かって先祖に礼をし、女房とひとりの男の子にいとまごいをしました「この世の縁はこれ限りだ、おれが死んでも、これこそ吉十郎の子だと言われるように育ててくれ」と頼む言葉も鼻につまって、よく出ませんでした。女房は夫のすがたの見えなくなるまで見送り、あとは、よよと泣きくずれました。

村人に案内されて現場に来た吉十郎は、役人衆に向かい、「私ひとりではかないませんから、ぜひ助太刀（すけだち）をしてください」と、くれぐれも頼んでから、猫又の前に立ちました。見れば、大きなまなこ、鋭い歯、たけりうめく声、さすがの吉十郎もおそろしく思いましたが、請人のために一命を捨てようと、猫又をにらみつけて大声をあげ「おのれ、ばけもの、大切な人を殺した天罰によって、おれが退治に来た、そこ動くな」と言うが早いか、手やりをうと落ちました。吉十郎は「よれや者ども」と叫んだが、だれもしりごみをして、よって来ません。

吉十郎は猫又のせなかに馬乗りになり、両ももでしめつけると、猫又は吉十郎を乗せたまま走り回り、やがて吉十郎のももに食いついて、どうとばかり引き落としました。はっとした大ぜいが「吉十郎、刀」と言ったので、吉十郎も気がつき、名剣を抜くやいなやつかも通れと二太刀三太刀、猫又を突き通しました。さすがの猫又も三間ばかり飛びさがったが、たおれません。一方の吉十郎は、あわれ四〇才を一期（ご）として、永久の眠りにつきました。

立っていた猫又は、三日目に倒れました。吉十郎の死がいが運ばれると、妻子の嘆きは一通りではありませんでした。村人一同厚く葬礼を営み、口々に慰めました。

猫又の死がいは庄屋方に運ばれました。役人が寸法を改めさせたところ、くびの根から尾のつけ根まで九尺四寸（二八五㎝）、どう回り八尺五寸、顔の長さ二尺五寸、両耳の間一尺六寸、ものまわり三尺八寸、足の長さは二尺一寸ありました。これが生きていて高田公園にいれば、たちまち一大観光地になるでしょうに。

× ×

役人は猫又の寸法を書き上げさせたうえ、一同に「このけものはわれわれ五〇人で討ち取ったことにして、口上書を書いてくれ」と頼みました。庄屋始め一同は「それはいけません、吉十郎が命を捨てて退治したのですから」と言いますと、役人は「それに違いないが、討取りの命令をうけて来て、このまま帰ることはできない、腹を切るより外ない」と言いましたので、村人も気の毒に思い、しかたなく「猫又を退治してくださってありがたい」という意味の口上書を書いて役人に渡しました。

猫又の死がいが高田城下に着くと見物人が山のごとく集まり、その恐ろしさに驚きました。代官岡登次郎兵衛は討手の足軽たちを「大義、大義」とほめましたが、やがてウソがばれたため、全部高田から追放してしまいました。

また、吉十郎のふるまいは神妙であるとして、女房を呼び出し、弔慰金として、小判三枚と米一石を与えました。

猫又の死がいは、城の大手口の一の橋より一つ南方の、土橋（つさはし）口の外にあった代官屋敷に埋められました。

× ×

その後柳原時代に、猫又のたたりがあってはいけないといって、猫又の霊をなだめに、稲荷（いなり）さんをまつりました。場所は大町一丁目、今でもこの稲荷を、猫又稲荷と呼んでいます。

【写真は猫又稲荷】